

## 環境哲学・環境倫理学についてのいくつかの論争点

### ――穴見氏の批判を再考する

島崎 隆

穴見氏が拙著『エコマルクス主義』1\*を取り上げ、かなり明快に批判されたことについて私は考えるところがあったので、この場で議論を積み重ねたい\*2。もちろん学問の場で、批判はつねに歓迎されるべきものであり、そこでの議論によって、相互に生産的に理解が進み、あらたな認識の場へ進み出ることが望まれていると考えたい。事実私は、本論の作成のなかで、自分の主張をおおいに再検討できたのである。ましてや、氏と私とは同じ環境思想・教育研究会のメンバーであり、面識もあるという間柄なのである。私は学問的な議論でこそ、民主主義がもっともはっきりと発揮されるものと思う。というのも、現実的な場面とは異なり、そこではそれほど利害関係が絡まないからである。

以下では、まず拙著の概略を議論の前提としてあらかじめ紹介したい(第一節、第二節)。そのなかで、穴見氏の批判にも応えていきたい。次に本誌でも問題となっている環境哲学と環境倫理学の関係を論じ(第三節)、さらに穴見氏が注目する「言語論的転回」と「環境論的転回」について私見を述べたい(第四節)最後に氏が結論として提起する「自然を手段とする哲学」について論評したい(第五節)。

#### 1. 拙著『エコマルクス主義』の予備的説明

まず予備的説明として、自分が理解するエコマルクス主義の特徴を簡単に列挙したい。それはマルクス主義の説明に、とくにエコロジー的側面を加えて、まとめあげたものである(24頁以下)。

(1) 人間の主体性やその発現としての労働と生産を人類の生存と発展に不可欠なものとする。これを生態学として、基本的に人間―自然関係のダイナミズムに注目する。そこでは人間と自然の間の「物質代謝 Stoffwechsel」の構想が大きな役割を果たす。

(2) 環境問題の現代的原因の中心をなす、現存の資本主義社会や市場経済への批判をおこなうエコロジーである。この点で、資本の論理と活動が人間にたいしてのみならず、自然世界をいかに搾取し、貧困化し、汚染し攪乱するかのメカニズムを徹底して究明する。その意味で、環境的格差を暴露して、環境的正義を追求する。

(3) エンゲルスが追究したような弁証法的自然観(進化論的自然観、自然の階層性、自然科学の認識など)を基礎にし、そのうえで社会の発展が可能となるとみなす。これと関わって、マルクスでは、「自然の根源性」や「自然史的過程」の議論が注目される。

(4) 学問的にいうと、『資本論』に体系的に明示されたような政治経済学などを継承するという意味で、科学的・学問的 (wissenschaftlich) であることを標榜する。それはもちろん、社会批判を欠如した科学技術主義、近代合理主義を批判するとともに、他方、一種のロマン主義、神秘主義の立場もとらない。

(5) 古代から現代までの哲学史的伝統を継承し、方法論からすると、古代ギリシャ以来の「唯物論」と「弁証法」を基本とするエコロジーである。それは具体的には、フランス唯物論、フォイエルバッハの唯物論とカント、ヘーゲルらの弁証法的観念論とを高次元で統一する唯物論的弁証法となる。

(6) 資本主義までの人類史の発展を「史的唯物論」によって展望し、そのなかで社会における階級や階層に起因する差別や抑圧を実践的に解消して、「自然主義」と「人間主義」の統一を実現する共産主義社会を目指す。そこでは、人間—人間関係 (社会関係) の矛盾とともに、人間—自然関係の矛盾も同時解消して、人間が土地から切り離されない共同体的関係を回復することを展望する。

以上、足早にエコマルクス主義の特徴を列挙したが、他のエコロジーと比べて、この立場の総合性と強みが明示されていると思う。まずは現存の資本主義経済体制をもっとも深く鋭く認識しており、同時に弁証法的かつエコロジー的な自然哲学もまた保持している。この立場は、古代以来の歴史的発展観 (史的唯物論) と、哲学史的伝統を踏まえており、科学的・合理的な説得性を目指している。これに対応するようなエコロジーは他には見当たらないのではないか。もちろん、ソ連・東欧の現存社会主義の崩壊の原因については、マルクス主義は自己批判的に追求する義務をもっている\*3。マルクス主義ないしエコマルクス主義は深い偏見にさらされてきたが、いまや自己批判を含めて、豊かな内容を携えてきている。

## 2. 『エコマルクス主義』の「射程」と「方法」

ところで穴見氏は、初発的に、①拙著が、現代哲学におけるいわゆる「言語論的転回」にちなんで「環境論的転回」を発想したが、この二つの「転回」の関係が説明されていない、②「環境論的転回」の「射程」や「方法論」が不明である、と批判する (120 頁)。

以上は拙著の「序論」によって示されたが、①については、たしかに二つの「転回」の関係はまったく説明されていない。私は執筆当時、単にネーミングの問題をいっただけであり、それ以上説明する必要を感じていなかった。だが穴見氏は、この関係に重要性を見いだしているので、第四節でこの関係などをあらたに議論したいと思う。②についていえば、いかなる基準で「射程」や「方法論」があるとかないとかいえるのか、私には不明で

ある。私は従来のマルクス(主義)を批判的に新解釈をして、とくに社会主義・共産主義をエコロジー的観点から展望しているので、哲学的にできるだけ深く広い歴史的射程を提起したつもりである。もちろんその内容がどれほど説得力をもつかは、本文の展開次第である。本書を読解すれば明らかだが、現代のエコロジー的なテーマを盛り込んで、相当に突っ込んだ幅広い展開をしたつもりである。果して、氏は本書の第一章以下の具体的内容をどう受け止めたのだろうか。というのも氏は、別の論文で、「現代社会における資本主義のシステム」と「歪んだ競争原理」の弊害について述べているからである\*4。それならば、まさにエコマルクス主義の批判的分析とおおいに響きあうところがあると思われる。

さて、②についてだが、氏は拙著の冒頭部分の序論や第一章を丁寧に見ていくと、環境問題の思想的考察の「一般的展望」ないし「指針」が三点述べられているという。たしかにそれは、以下のとおりである(7頁以下)。

- (1) 人間—自然間の相互関係への注目
- (2) 他者(人間と自然)の支配と搾取の事実への注目
- (3) 生命の維持と再生産への注目

以上の三点については、拙著で説明が付加されているが、もはやここで繰り返さない。とくに(2)と(3)については、拙著の第二部で議論される「エコフェミニズム」が大きく関わっていると付加したい。ともかくこの三点は、環境問題を考えるうえで、幅広い「指針」として、方法論的な着眼点を述べているとはいえないだろうか。というのも、ヘーゲル論理学では、方法は内容と切り離されていず、それは内容の魂であり、実体であり、事物そのものの方法である、といわれている\*5。現実的内容が究められ、一般化されると、それは他の認識に応用できる方法となる。ヘーゲル論理学でも、弁証法的方法論は、最後の概念論(とくに「絶対的理念」の箇所)の豊かな認識の達成後に展開されている。こうして、以上の三点をしっかりと理解して環境問題の多様な現象にアプローチするとき、これら三点は現実認識に有効な方法ないし指針になるのではないだろうか。

また氏は、拙著が「注意すべき2つの点」(34頁)として、①レーニンが活動した1920年代以後のソ連において「ソヴィエト・エコロジー」が存在したこと、それがスターリニズムのなかで消失したこと、②エンゲルスの「自然弁証法」がエコロジー的な意味で復権されるべきこと、を指摘している。まさにそのとおりであって、実はマルクス、エンゲルスの著作を率直に読めば、エコロジー的な内容がおのずと見られるのが事実であって、ところがそれが、スターリニズムの支配以後、エコロジーなどはブルジョア・イデオロギーだとして否定されてしまったのである。

また②に関して、拙著では、従来のマルクス・レーニン主義では、この自然弁証法が重

視されたとしても、それがエコロジーとは無関係なものとみなされていたのにたいして、それをエコロジー化して、環境問題を認識するときの自然観としてあらたに復権することが提案されている（詳細には129頁以下）。たとえば、エコロジーに対応するようなこの自然観を方法論的な着眼点としてはいけないのだろうか。自然環境を問題にするさいに、この弁証法的自然観が、自然の見方として、機械論的自然観や神秘主義的な自然観に陥らないための導きの糸となってくれることは疑いない。またより広くいえば、唯物論的弁証法というのは、まさにマルクス主義の方法論であった（弁証法については、簡単に133頁、243頁で説明される）。

そしてまた、穴見氏も「マルクス自身の思想を除けば」ということで、以上の二点を述べたことを了解している。そうすると、エコロジーを構築するうえで、自然観・自然哲学は不可欠であるので、それをエンゲルスの弁証法的自然観で充当したことは事実である。とはいえ実は、その自然観がエコマルクス主義の最重要の部門ではなく、むしろ拙著本文で詳細に展開されたマルクス自身の経済学的かつ思想的內容が重要であって、そこにこそ、環境問題の思想的解明のための方法論的認識が数多く存在するといえるだろう。たとえば、フランクフルト学派のアルフレート・シュミットがマルクスから取り出した「自然の社会的媒介と社会の自然的媒介の統一」という構想は、マルクス自身でまだ明快に叙述されていないとはいえ、スケールの大きな方法論的認識といえないこともない（66頁以下）。マルクスの物質代謝論、とくに人間と自然の間の物質代謝としての労働論もまた、そういったスケールの大きなエコロジー的認識方法といえないこともない（85頁以下）。またマルクスは、共産主義を、人間主義と自然主義の統一の実現とみなした。このさい、人間主義とエコロジーでいわれる「人間中心主義」とは意味が厳密には同じでなく、自然主義と「自然中心主義」とも同じではないが、あえてそれぞれ重ね合わせられる余地があると考えた場合、この人間主義と自然主義の統一の展望を方法論といえないこともないだろう（122頁以下）。さらにまた、拙著第Ⅱ部の「自然は人間の非有機的身体である」というマルクス自身の命題は、第五節で少し詳しく述べるように、社会エコロジーのジョン・クラークに誤解されてしまったが、その誤解を解くと、それがまさに人間—自然関係を説明するための深遠な方法論的認識になっていることがわかる。それはマルクスの身体論として、単なる自然中心主義でもなく、またクラークが誤解したように、「自然の功利主義的理解」（148頁）に陥っているわけでもなく、まさに自然と人間を深く媒介する認識を表現しているのである。

本節の最後で、エコマルクス主義が従来マルクス主義の反省と革新を伴いながらも、マルクス主義のひとつの「応用」といわれると、私のいう「環境論的転回」が「言語論的

転回」に比肩しうるものかどうか、疑わしくなる、という氏の批判について考えたい（120頁）。拙著では、それはエコマルクス主義がマルクス主義の「応用分野」か「革新」か、というややレトリカルな表現で描かれる（9頁）。結局私は、この両側面は両立可能と考えているが、エコマルクス主義はマルクス主義の単なる平板な拡大とか応用ではなく、「マルクス主義全体への反省と革新が不可欠である」（11頁）と述べたわけである。つまり、エコマルクス主義が成立することは、同時に、マルクス主義の内容にも大きな反作用的な変化を及ぼす。その端的な例は、エコマルクス主義が人間と自然の間の矛盾を強調するとき、それは従来の資本主義の経済的かつ階級的矛盾について、派生的・従属的なものとして、この生態学的矛盾を付加するというものではない。マルクス主義のエコロジー的な経済学者のジェームズ・オコンナーが指摘したことから考えると、資本主義の「第一の矛盾」が生産力と生産関係の矛盾であり、さらに階級的矛盾であり、他方また、人間—自然間の矛盾、自然環境問題（オコンナーのいう「生産の条件」）が「第二の矛盾」なのであり、この両矛盾はともに資本による経済的活動から同時発生するといえる\*6。こうして、資本家による搾取は自然物である人間の身心を悪化させるが（過労死がその典型）、それは同時に、自然界を汚染・破壊し、さらにそれが回り回って人間の健康をも一層蝕むのである（ガンが多発など）。この考えは、マルクス主義そのものを内容的に豊かにさせるものだろう。

### 3. 環境哲学と環境倫理学の関係

穴見氏はおもに環境倫理学の観点から議論したと思われるが、ここから、おのずと環境哲学と環境倫理学の関係の問題が出てくる。この点を、ここで議論したい。周知のように、環境倫理学の有効性の問題性ととも、本誌『環境思想・教育研究誌』でこのテーマが取り上げられてきた\*7。

氏は、「環境論的転回」を扱った前掲論文の副題を「21世紀環境思想の新たな地平を求めて」としている。私が理解するかぎり、「環境思想」という用語は本文では出てこないようで、他方、本文では「環境倫理学」という用語がしばしば出てきている。この点で、この二つの用語の関係が、私にははっきりしない。私自身はどうかといえば、前掲論文で、「環境倫理学」と「エコフィロソフィー」という用語をはっきりと区別して用いている（102頁）。「エコフィロソフィー」は「環境哲学」「環境思想」「環境倫理学」などの総括的名称として用いたものであり（99頁）、この点で、環境倫理学は、このエコフィロソフィーの一部門である。だから当然、環境倫理学のみを論じていても、環境の哲学・思想の全体（エコフィロソフィー）をおおうことにはならない。この点で私は、エコフィロソフ

イーを以下の四つの部門からなると考えたのであった（102 頁）。

- (1) 自然観、自然哲学の形成というテーマ
- (2) 環境倫理や生命倫理のテーマ
- (3) 経済と社会の認識、社会哲学による環境問題の理論的かつ実践的認識
- (4) エコロジカルなライフスタイルの形成というテーマ\*8

私はここで議論をいちいちくり返さないが、環境倫理学がいきなり環境の哲学・思想の全体を包括すると考えることはできない。哲学全体においても、論理学と倫理学とはそれぞれ、哲学の理論部門と実践部門に由来しており、古くは前者は形而上学とか存在論と呼ばれた。環境倫理学は別途、何らかの自然観、自然哲学を前提しているはずであるが、その自然観をそのものとして解明することは、環境倫理学の課題ではないだろう。いままでの議論からいうべきことは、エコマルクス主義と絡めていうと、上記の(1)こそ、エンゲルスの弁証法的自然観である。他方、エコマルクス主義では、(2)は従来、意識的に明確には提起されなかったといえよう。それはマルクス主義で規範理論や道徳論が明示されなかったことに由来するが、だが近年では、その種の議論も発展してきている\*9。またとくに、(3)こそ、エコマルクス主義が得意とする分野であり、マルクス経済学や史的唯物論の認識がおおいにここに関わる。環境倫理学は社会問題化されることによって、抽象的な問題設定を免れるのである。自然の搾取という問題についても、エコマルクス主義は、資本主義下における労働者の搾取と自然の搾取とが同時進行するということを強調する。私は拙著『エコマルクス主義』で環境的正義について何度か言及したが、抽象的な正義・不正義の議論がここでリアルになる。というのも周知のように、環境的正義は、「環境人種差別」という用語とセットになって、黒人やアメリカ・インディアンなどの居住地域の近くに有害廃棄処分場が立地されることに端を発して、正義という規範が人種、政治や経済の問題と結合して現実問題化したからである\*10。この点では、牧野氏がエコロジーが発展した現段階を踏まえて、「自然中心主義から環境的正義へ」というスローガンを掲げていることは、的確な着眼点であるといえよう\*11。こうして、(3)の社会哲学的領域がリアルに環境問題の社会的根源に迫ることができるだろう。(4)はやや曖昧であるが、すべての人びとが直接に環境に関わっているかぎり、ここで、人びとのライフスタイルがあらためて問題となると考えて、一項目を設けた。

ここで、いわゆる環境哲学と環境倫理学の関係に関する本誌内の二つの論文に触れたい。ひとつは、桑子論文であり、ここでの氏の哲学や倫理学の教育実践の内容は、工夫に富み、おおいに参考にさせて頂いた。氏の『気相の哲学』などもかつて興味深く拝読したことがある。氏によれば、倫理学の部分でいうと、環境倫理学が倫理学の本質的で重要な部分で

あるので、前者は後者の応用的分野であるということはいえない。現代に生きる私たちにとって、環境の問題は、人間と世界を語るうえで欠くことができないからである…\*12。

以上が氏の見解だが、環境倫理学をひとつの応用倫理学としても認める私の見解とは明らかに異なる。だが他方、私はさきほど述べたように、環境倫理学の成立は、倫理学そのものに反作用し、その内容を変化させ、充実させることができると考える。だから、応用部門であるということと、内容上、倫理学そのものにとって重要な部分となるということとは矛盾しない。実際、エコマルクス主義の出現は、マルクス主義の内容をおおいに変貌させ、環境問題を議論することなしにそれを展開することはアナクロニズムとなるだろう。端的にいうと、上記のオコンナーに従って、資本主義の第一の矛盾が従来の社会経済的矛盾であるならば、第二の矛盾は自然環境の破壊・汚染にまつわる矛盾であるということは、マルクス主義一般の議論としても適切だと考える。さて他の観点でいえば、実はいわゆる応用倫理学というと、周知のように、環境倫理学のほかにも、生命倫理学、情報倫理学、技術倫理学、企業倫理学なども登場してきている。そうした内容は倫理学一般のなかに適切に取り入れられるべきだろう。そしてまた、このなかで私が多少とも専門的に言及できるのは環境倫理学くらいしかないが、だからといって、この環境倫理学だけがこれらのなかで重要であるともいえないだろう。

さてもうひとつ取り上げるのは、上柿論文である\*13。

氏は図—1において、「哲学—倫理学—応用倫理学—環境倫理学」という外延的広がりを描いている。これは私の考えと合致しており、賛成したい。また、図—2で「思想—哲学—倫理学」、またそれと対応して、「環境思想—環境哲学—環境倫理学」という包摂関係を考えている。これも、「思想」が「哲学」よりも幅広いと考えた場合、成立する考えだろう。もちろんこのさい、すでに指摘したように、形式論理的にこの包摂関係だけを指摘すればいいということではすまず、内容的にいうと、それらの分野のダイナミックな相互作用も考慮されなければならないだろう。

#### 4. 「言語論的転回」と「環境論的転回」について

穴見氏は、「言語論的転回」をヒントにして、そこから「環境論的転回」の意義と特質を探ろうとする。そこでまず、「言語論的転回 linguistic turn, Wendung zur Sprache」について述べたい。

この用語はおもに、近代哲学批判として、20世紀転換期に成立してきた哲学・思想の傾向であり、オーストリアのウィーン学団のメンバーであった、グスタフ・ベルクマンの論文「論理実証主義、言語、形而上学の再構築」\*14 で初めて唱えられ、そののちに米国の

プラグマティストのリチャード・ローティが広めたものである。この点では、「20世紀は言語の世紀である」ともいわれてきた。この「言語論的転回」が近代哲学批判にたいしてもっている意義とはどういうものか。それは、哲学的認識を含め、実はすべての対象認識は、言語の助けを借りて成立しているという主張である。近代哲学が目してきた意識や観念、理性も、実は言語によって媒介されている、言語形成物である。超言語的なものは存在するが、それもまた、言語による媒介によって初めて認識される、したがって、まずは言語を分析し、言語を批判しなければならない。「現実から言語へ」「意識から言語へ」というのが、「言語論的転回」の唱えるパラダイム転換のスローガンである。それはとくに、「精神」「理性」「意識」「主体」「民族」などを強調する難解なドイツ観念論の形而上学的言語が、とくに曖昧だとして批判される。オーストリアの言語哲学者（フリッツ・マウトナー、フェルディナント・エーブナーら）、論理実証主義者（ルドルフ・カルナップ、モーリッツ・シュリックら）、ウィトゲンシュタインらがこう批判し、また英国のラッセル、ムーアらの分析哲学者がその傾向をもっていた。この点で、イギリスのマイケル・ダメットは、ハプスブルク帝国のオーストリアに注目して、分析哲学の起源は「英米系」ではなくて、オーストリア哲学の始祖とされるフランツ・布伦ターノの存在を含めて、「英圏系」といわれるべきだと指摘する\*15。

ここで詳しく述べられないが、カール= オットー・アーペルは、意識的に「言語論的転回」の立場から、アリストテレスがいうところの「第一哲学」の転換について、《古代ギリシャ（形而上学・存在論）→近代（批判的認識論、意識の哲学）→20世紀（言語分析）》という図式を描いている\*16。これはまた、ハーバマース、ローティらの定式化でも大体同様であって、ローティはさらにそこから、「プラグマティズム的転回」に到達している。さて興味深いことに、穴見氏は、野家啓一氏の見解などを参考に、デカルトを批判するという観点から、「言語論的転回」と「環境論的転回」を対比している。前者は、コギトにあるような私秘的な意識から公共的な言語へ、意識分析から言語分析へという転換を意味し、他方後者は、機械論的自然観や二元論にもとづく人間中心主義への批判を中心とするという（125頁）。これはたしかに妥当な対比であり、賛同したい\*17。

さて、「言語論的転回」や「環境論的転回」を提起する論者の考え方を「転回」史観と呼びたい。古くは、カント『純粋理性批判』で、「コペルニクス的転回」が提唱された。そのさい、もちろんすべての場合ではないが、「転回」がそれだけで強調されると、前段階との断絶が強調されてしまい、過去との連続面、過去からの継承面が無視されるきらいがある。このことは意外と重要であって、私見では、哲学史であれ、歴史は、断絶と飛躍の重なりではなくて、過去との連続面と断絶面（「転回」）との弁証法的な統一である



と思うし、こうした弁証法的見方がものごとを客観的に正しくとらえる見方ではないだろうか。この点では、トマス・クーンのパラダイム論の構想も、自然科学分野でも認識上の革命的転換が存在するという点を展開した点で画期的ではあるが、断絶面のみを強調しすぎていると思う。スローガンとして「転回」や「パラダイム」を使用するのはかまわないが、そこにある欠点に配慮する必要があるだろう。この点で、たとえば（エコ）マルクス主義の史的唯物論も（さらに哲学史も）、社会経済構成体の生産関係は質的飛躍をともない発展するが、生産力や技術の面で、連続的に蓄積されていくと考える。

さて「転回」史観のもうひとつの欠点は、ホップズ、ベーコン、ロック、ルソー、デイドロらの近代の市民社会の哲学の出現を、哲学史におけるひとつの転回と見ないことである。実は近代の意識哲学の転回、認識論的転回と称されるものは、近代市民社会の発生にともなう哲学的転回と強く関わる。むしろ、この社会哲学的な転回こそが、意識や認識のありかたの変革の根底にある。せんじつめれば、ルネッサンス、宗教改革を先駆的形態として、意識や認識を重視する近代的人間の主体的あり方が社会的に必要とされたのであり、一連の市民革命が、封建体制を批判し、神中心の権威主義的なあり方を崩壊させたのである。以上のことが、哲学史的発展において、踏まえらるべきだろう。

エコマルクス主義の成立や「環境論的転回」をいう場合も、私は、単に断絶面だけではなく、労働と生産を重視する従来のマルクス主義の合理的内容を継承しつつ、あらたにエコロジー重視の考えとそれを弁証法的に統合しようとする。そうすると、自然を客体として効率的に利用し支配する近代的な労働観にたいして、それをあらたに解釈しつつ、自然重視のエコロジー的労働観へと転換することとなる。「人間と自然の間の物質代謝」という発想がそれであるが（拙著の第三章に詳しい）、そこには実は、それに対応して、自然観の変転もある（拙著第四章五節）。この点を少しだけ述べたい。

ことはエンゲルスの自然弁証法の客観的な自然観と内山節氏による労働的自然観を相互に排斥的に見るのではなく、弁証法的に統一できないかという問題関心から始まる\*18。人間と自然の関係を主体と客体という用語でとらえた場合、そこに三つのケースが考えられる。このさい、「主体 Subjekt」とは、「客体 Objekt」と対比的に事物の能動的・積極的側面を表現し、逆に「客体」とは、事物のもつ働きかけられる对象的側面を示す。両用語とも、相互的に規定しあう。第一は、人間が主体となり、自然が客体となる側面であり、これは労働の基本論理である。自然は人間の目的的活動によって変革させられる素材である。道具や機械をはさんで、自然は労働生産物となる。人間は日々、こうした労働を継続することによって生活を成立させてきた。労働は人間社会成立の永遠の条件である。第二に、人間も自然も相互に主体となりあうという関係である。生命はある意味主体であ

るので、たとえば、ペットなどの動物と関係することで、人間はそれと相互にコミュニケーション・パートナーとなる。そこには並の人間相手よりも深い愛情関係すら生まれることもある。こうした相互主体的関係を、人間からの想像を交えて、あらゆる自然物と形成することが可能である。「おーい雲よ」と呼びかける詩人にとって、雲は友だちといえるかもしれない。そこには相互に平等の承認関係がある。第三に、人間が客体、自然が主体という関係である。まず自然進化論を哲学した場合、それは自立的に運動し発展する自然が、多様な生命と人間を数十億年かかって生んだのであり、そこではある意味、大文字の自然が主体であり、人間は産出された客体であるといえないだろうか。ここでの自然は、人間にとって偉大であり、畏怖すべきまた崇高な大自然である。そこでの自然は人間を生んだが、地震、津波、火山活動などによってあつという間に人間を滅ぼすものでもある。エンゲルスもまた、こうした自然がいつかは人間を滅ぼすだろうと述べている。

こうした三つの側面をもつ自然を別々にではなくて、相互に浸透させあつて弁証法的に考えることが、さらに望まれる。たとえば、労働の論理のなかに、自然を主体と見る観点を洞察し、さらに労働の基盤に大自然の営みを展望するということであり、こうした労働がある意味、エコロジー的で持続可能な労働といえるのではないか。とくに《農》における労働は、それが生命を育てる営みであるかぎり、主体—客体の労働のなかに、自然を生命的主体と見るコミュニケーション的な観点を浸透させることが必要であろう。日本でも、前近代の《農》の仕事には、そういう傾向が見られた。

ところで穴見氏は、私の「環境論的転回」の構想については、そこに近代哲学批判の側面があるが、そこで「人間中心主義的な議論から非人間中心主義的（自然中心主義的）へのパラダイム転換が企図されている」、だがそこに「方法論的革新はあるのか」と疑問を呈している（123頁）。しかし私は、すでに述べたように、「環境論的転回」を考えたときに、人間中心主義から自然中心主義への転換が必要だとはいっていないのであつて、むしろ人間主義と自然主義の統一ということを強調している（拙著の第四章第六節「マルクスの《自然主義—人間主義》の復権」を参照）。環境問題を解決するさいに、単に自然中心主義に立ったところで、社会問題化されないかぎり実践的展望は出ないし、私たちが人間であるかぎり、徹底した自然中心主義には立てないのである。上記の人間と自然の物質代謝の構想も、自然観の三つの側面も、ある意味《自然主義—人間主義》の統一の考えを含んでいるといえよう。

## 5. 「環境論的転回」と「自然を手段とする哲学」

さて、私は「言語論的転回」を第一次と第二次とに区分したことがあつた\*19。「言語

論的転回」と「環境論的転回」のつながりについては、その点で、上記第一次と第二次の「転回」にそれぞれ即して考えたほうがよいように思われる。

第一次「言語論的転回」とは、20世紀転換期のマウトナー、ウィトゲンシュタイン、カルナップらの時代で、記号論的観点からいえば、おもに構文論、意味論にそって言語が分析され、批判されていた。それはある意味、言語という公共的な要素に依拠するとはいえ、そこには実質、方法的独我論とでもいえる立場があった。論理実証主義からは距離を置いて、言語をつねに人間相互のコミュニケーションの観点からとらえたマウトナーらを除き、一般に言語が人工言語（数学的論理学）となり、人びとのコミュニケーションの観点からとらえられなかった。第二次「言語論的転回」は1950年代ころから、後期ウィトゲンシュタイン、ハーバマース、アーペル、オースチンらによっておこなわれ、言語、とくに日常言語を、それを使用する人間の側から、語用論の観点からとらえ、とくに言語コミュニケーション論を中心とした。実は客観的な真理認識ですら、人びと（科学者を含めて）の間の議論と合意によって初めて獲得される。

私見では、穴見氏がこの第一次「言語論的転回」から「環境論的転回」へとつながる必然性を見いだしたのは、「言語を対象とする哲学」ではなく、「言語を手段とする哲学」という構想であり、さらに第二次「言語論的転回」から「環境論的転回」へとつながる必然性は、尾関周二氏が強調し、穴見論文でも指摘された、自然にたいするコミュニケーション的視点にあると総括できるだろう（124 頁以下）。

こうして氏によれば、第一次「言語論的転回」については、野家氏を継承して、ここで重視されるのは、「言語を対象とする哲学」ではなくて、「言語を手段とする哲学」であった\*20。これによって、本当の「環境論的転回」が可能となるというのだ。たしかに前者は、オーソドックスな言語哲学のことであるが、後者に即して、氏は「自然を手段とする哲学」を構想したのであった（125 頁）。ところで私は、第一次「言語論的転回」から「自然を手段とする哲学」のアイデアを引き出すことは考えてはいなかった。だが、すでに述べたように、私は自然を主体と見て、コミュニケーションの観点から自然にアプローチするという事は重視していた。とはいえ、それも、第二次「言語論的転回」と意識的に結合することを目指したわけではなかった。

それでは、「自然を手段とする哲学」とは何か。氏はまず「人間—自然—人間」関係の視点において、「人間—自然」関係と「人間—人間」関係を同時に把握すべきだという（126 頁）。「その場合、自然は人間と人間とを媒介する存在として、労働における対象としての『客体』でもなく、コミュニケーションにおける『主体』でもなく、『人間—自然』関係を内包する『人間—人間』関係の『媒体』として現れる。」（126 頁）したがって、

「自然を手段とする哲学」とは、「自然を人間理解（倫理）の不可欠な『媒体』（契機）とするものとして理解されなければならない」とされるのである。ここに氏の積極的主張があると思われる。さらにこの点で氏は、人間が自然を必要とするので、それを保護しようとするという。だからその意味で、人間が「自然を手段とする哲学」を唱えるのだ（126頁）。この理由づけはわかりやすい。さらに氏は、人間の身体を「媒体」としての自然に連なるものとして注目する。こうして、デカルト的な「人間—自然」関係の溝は、その間に身体としての自然を位置づけることによって解決されるという。以上の氏の興味深い構想は、論文の最後で展開されており、まだ未展開であると思われるので、さらにあらたに、内容を述べてほしいという気がする。

私としては、自然＝身体を「手段」ないし「媒体（契機）」とする着眼点は興味深いと考える。なぜならこれは、ある意味、エコマルクス主義的な唯物論に近づいていると評価するからである。だが、そのことによって自然のもつ「客体」や「主体」の側面を否定するならば、以上の私の自然観から明らかなように、それは一面的になるのではないか。また、人間にとって労働は生活上の不可欠の条件であるかぎり、自然を「客体」化することは避けられないが、問題はいかにして、環境を破壊しないようなエコロジー的な労働観をもつかである。エコマルクス主義こそ、それをテーマ化してきたといえる。さらにまた、自然を生命的な「主体」、さらにコミュニケーションでの相互「主体」と見ることこそ、まさにエコロジー的ではないだろうか。だから、自然を具体的に「手段」ないし「媒体」と見ることと、それを「主体」と見ることとは、矛盾せず、むしろ統合して考えるべきではないだろうか。自然のもつ主体性の認識は、「手段」といわれることで失われてはならない。さらにまた、自然を「手段」ないし「媒体」と見る前に、人間自身が一個の自然存在であることが踏まえらるべきだろう。つまり人間がまさに進化論的過程のなかで自然によって産出された自然存在であり、外界としての自然が人間にとって「基盤」ないし「根源」であり、むしろ最初から、自然が水、空気、草木、食糧、住環境などを提供して保護してくれているからこそ、人間が生きていけるという根源的事実が踏まえられなければならない。それを大前提にしてこそその「自然保護」なのである。まずは自然に感謝することが出発点だろう。総じて、以上を含んだ、エンゲルスが提起したような壮大な自然観が別途、要請されるだろう。

ここでエコマルクス主義を出すのは、我田引水の感があるかもしれない。だが、身体の問題は、唯物論であるエコマルクス主義にとっても実は大きなテーマである。以下簡単に述べたい。

マルクスは『ドイツ・イデオロギー』で、みずからの史的唯物論を始める大前提として、

現実的諸個人のもつ動物的身体組織、およびそれによって与えられる自然への関係について言及している。これに制約されて生活を始めるやいなや、人間は動物から区別されていく\*21。かつてマルクス身体論については、自然環境問題はまだ念頭に置かれてはいないが、いくつかの研究がなされてきた\*22。また、拙著の第二部にあるように、「自然は人間の非有機的身体である」という命題は、マルクス『パリ手稿』（いわゆる『経済学・哲学草稿』）で、「自然が人間の非有機的身体 (unorganischer Leib) であるという意味での自然は、それ自身が人間の肉体でないかぎりでの自然のことである。人間が自然によって生きていくということの意味は、自然は人間の身体であり、人間が死なないためにはたえずそれと関わりあっていかなければならない、ということである。…というのは、人間は自然の一部であるからだ」23\* というような表現に現れる。だからこれは、人間が動物として、自然にたいして絶対的に依存している存在であるということの意味している。まさに人間が単に意識や精神だけの高級な存在ではなく、まさにまず身体的存在であることが、ここで明示される。ここにマルクスの自然中心主義・唯物論が現れるが、同時に人間は、この自然との関わりを動物とは異なり、労働という自然変革の活動によって遂行してきた。ここにマルクスの人間中心主義（この意味での唯物論）が現れる。だからマルクスにおいて、自然中心主義と人間中心主義が身体（的活動）を媒介にして、スムーズにつながっているといえよう。

そして周知のように、この箇所は、「疎外された労働と私的所有」という断片のなかで書かれている。以上の認識は本源的な人間的事実であるが、資本主義の疎外された社会では、人間はすでにこの自然との根源的結合から切り離されており、通例、みずからの労働力を売ることによって、そこで得られた賃金を使って商品を購入して、そこで初めて自然との結合を果たすのである。他方そこでは、自然—土地は人間の共同体から切り離され、商品化され、自然が利潤追求の材料となる。環境問題が目に見える前に、自然がすでに商品化されているという事実が存在するであろう。マルクスはもう一か所、いわゆる『経済学批判要綱』で、自然が人間の「非有機的身体」であるということを指摘する。興味深いのが、ここでは言及しない（前掲拙著、190 頁以下参照）。

穴見氏が注目する身体の問題と関わって最後にいいたいことは、本誌でも寄稿している、社会エコフェミニズムのアリエル・サレーが“embodied materialism” について強調していることである\*24。これは、「身体化された唯物論」「具体化された唯物論」などと訳せるが、まだ適訳ではないようだ。ともかくそこでは、人間のもつ身体性、いや人間そのものである身体性を唯物論的かつエコロジー的観点から、人間が男女の性関係、ジェンダー、再生産（生殖）、労働する身体、食、家事労働、老人と子どもの介護、病気などの問

題から幅広く論じられることとなろう。アメリカのエコマルクス主義の雑誌『資本・自然・社会主義』では、サレーが中心となって、エコマルクス主義とエコフェミニズムの対話がかつて開かれたが、そこでの主要テーマのひとつは「身体 body」であった\*25。まさにここでは、「身体」を機軸にして、エコフェミニズムの唯物論とサレーらの左翼的唯物論が議論しあっていて、興味深い。紙幅が尽きたので、その内容は展開できないが、ここで自然環境問題がエコフェミニズムの領域へと広がっていくことを指摘しておきたい。

\*1 島崎『エコマルクス主義—環境論的転回を目指して』知泉書館、2007年。以下、本文中で頁数を記する。

\*2 穴見慎一「『環境論的転回 (ecological turn)』とは何だったのか—21世紀環境思想の新たな地平を求めて」、『環境思想・教育研究』第10号、2017年。以下、本文中で頁数を記する。

\*3 以上の点では、ソ連・東欧の社会主義体制の崩壊を踏まえた、拙著『ポスト・マルクス主義の思想と方法』こうち書房、1997年を参照のこと。なお実践的展望としては、拙論「エコロジー的社会主義への展望」、『葦牙』第40号、2014年を参照。

\*4 穴見「〈共生 (kyosei)〉の原理論を再考する」、『環境思想・教育研究』第九号、2016年、86頁。

\*5 ヘーゲル『大論理学』（寺沢恒信訳）3、以文社、1999年、351頁以下参照。

\*6 James O'Conner, Natural Causes, The Guilford Press, New York, 1998. 所収の第八章の「資本主義の第二の矛盾」を参照。なお日本では、オコンナーの影響を受けた、長島誠一『エコロジカル・マルクス経済学』桜井書店、2010年が目される。

\*7 本誌、第七号、2014年における特集論文Ⅱ「今なぜ環境哲学か—環境倫理学との関係を問いつつ」。本誌、第八号、2015年における継続特集「今なぜ環境哲学か—環境倫理学との関係を問いつつ(Ⅱ)」。この第八号で私は、論文「環境倫理学の問題性とエコフィロソフィーの展開」を掲載している。以下、本文中に頁数を記する。

\*8 エコフィロソフィーの四つの部門は、拙論「『エコフィロソフィー』の基本課題をめぐって」、『一橋社会科学』第四号、2008年の第二節「『エコフィロソフィー』の四つの分野」をまとめたものである。

\*9 最近、松井暁『自由主義と社会主義の規範理論—価値理念のマルクスの分析』大月書店、2012年、がきわめて詳細に、「疎外」をキーワードに、自由主義的規範理論との対比で、マルクス主義の規範や価値の理論を展開しており、注目に値する。

\*10 戸田清『環境正義と平和』法律文化社、2009年所収の第二章「環境正義と平和」な

どを参照。

\*11 牧野広義『環境倫理学の転換』文理閣、2015年所収の第一章参照。なお氏は同書の第四章で、正当にも、「エコ・マルクス主義」も取り上げている。

\*12 桑子敏雄「環境哲学と環境倫理」、『環境思想・教育研究』第七号、60頁。

\*13 上柿崇英「環境哲学と環境倫理学の位置付けをめぐる一私論」、『環境思想・教育研究』第七号、2014年、98頁。

\*14 Gustav Bergmann, "Logical Positivism, Language, and Reconstruction of Meta physics(in part)", Richard Rorty(ed.), The Linguistic Turn, Chicago, 1992.

\*15 ダメット『分析哲学の起源』（野本和幸・他訳）勁草書房、1998年の序、2頁。

\*16 アーペル『哲学の変換』（磯江景・他訳）二玄社、1986年、6頁参照。

\*17 穴見氏がここまで「言語論的転回」を重視するのならば、拙著『《オーストリア哲学》の独自性と哲学者群像』における言語批判、言語分析の考察をご覧いただきたい。ローティらの説明も含まれ、デカルト形而上学への言語的批判も、カルナップ、マウトナー、マツハ、エーブナー(105頁以下)らによっておこなわれている。

\*18 内山節『自然と人間の哲学』岩波書店、1988年、10頁以下。内山氏はエンゲルスの自然弁証法をおおいに批判するが、私はそこに両立の試みをおこなった。

\*19 穴見論文でも、その箇所が引用されている。尾関周二・他編『哲学中辞典』知泉書館、2016年所収の「言語論的転回」（島崎執筆）の項目。

\*20 『岩波哲学思想事典』1998年の「言語論的転回」（野家啓一執筆）の項を参照。

\*21 マルクス/ エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』（渋谷正編・訳）新日本出版社、1998年、16頁参照。

\*22 田中吉六「マルクス身体論・序」、『情況』第九号、1968年が初発的なものだろう。

\*23 MEGA I-2, S. 368f. 山中隆次訳『マルクス パリ手稿』御茶の水書房、2005年、81頁。

\*24 Ariel Salleh, "Sustaining Marx or Sustaining Nature?" Organisation & Environment, December 2001, p. 445.

\*25 Capitalism Nature Socialism, December 2006, pp. 67ff.